

戦前期の大日本製糖大東製糖所と北大東出張所社宅街について

正会員 ○辻原 万規彦* 同 今村 仁美**
同 安浪 夕佳***大日本製糖 東洋製糖 製糖業
燐鉱 工場 航空写真

1. はじめに

戦前期日本の旧植民地諸地域全てでみられた製糖業を取り上げ、工場と社宅街の建設の過程を明らかにして比較することによって、即ち「製糖業に係わる建築活動」という指標または評価軸を用いることによって、いわゆる「内国植民地」を含む旧植民地諸地域と「内地」における当時の建築活動のそれぞれの地域での特質性や相互の同質性について考察できると考えられる。

本稿では、その手始めに南北大東島における旧大日本製糖の工場と社宅街の様相を明らかにすることを目的としている。南北大東島における戦前期の製糖業、燐鉱業ならびに社宅街に関する調査として、具志川市史編さん室による聞き取り調査や沖縄県教育委員会による総合調査、国立民族学博物館の共同研究によるシンポジウムなどがある¹⁾。なお、本稿では、当時の用語や呼称をそのまま用い、原則として現代仮名遣いに改めた。

2. 南北大東島の概要²⁾と調査方法

南大東島では M36(1903)に八丈島出身の玉置氏によって開拓が始まり、北大東島では M43 に燐鉱の採掘が開始された。T5(1916)に、両島ともに東洋製糖(株)に売却され、南大東島に本格的な製糖工場が、北大東島に鉱業所が建設された。S2(1927)に東洋製糖は大日本製糖(株)と合併し、第二次世界大戦中まで操業を続けた。

2008年9月に現地調査を行い、聞き取りを行った。また、糖業協会での資料収集、大日本製糖での聞き取り調査のほか各種資料を収集した。

3. 南大東島における旧大日本製糖の社宅街

図1に、昭和10年代後半頃の旧大日本製糖大東製糖所の社宅街の復原図を示す。玉置氏の時代とは異なる位置、島中央部の盆地の南西部に工場が建設されたのは、大量の冷却水を確保しやすい島中央部の沼に近く、かつ沼に接近して高台がある場所を選んだ結果と考えられる。また、製糖期(冬から春にかけて)の卓越風である北風を避けて工場の西側に社宅街を展開させたと考えられる。そのため、特に、工場より一段高い場所に建設された社員の社宅群は工場に隣接してはいない。一方、現業員クラスの社宅街は、工場と同じ高さの土地、もしくは社員の社宅よりも低いレベルの土地に展開している。地形に沿わせつつ、何度かに分けて拡張したことが推測される。

社宅は、同じ四戸建社宅でも建坪や間取りが様々である。社宅も含め、様々な建物は、木造あるいは現地産の石造であり、古いものは檳榔の葉葺き、新しいものはトタン葺きであった。四戸建社宅の場合は実際には二戸+二戸の形式であり、間に「中道」がある。これは通風を確保するためと考えられる。

様々な関連施設も建設された。離島であるため娯楽に乏しく、社員用と現業員用の倶楽部、テニスコート、柔道場、剣道場などが設けられ、会社購入の映写機で活動写真大会も催された。また、住民の生活を支える会社直営の売店、病院、小学校なども建設され、後には郵便局も設置された。工場と社宅街の北側の玉置氏の時代からの集落には、小学校や警察官駐在所が設けられていた。このうち、小学校は玉置氏の時代から開設されており、東洋製糖に移った後の T6(1917)には、私立南大東尋常高等小学校と改称され、教育費は全額会社が負担していた。

工場関連施設では、幾つかの倉庫(石造、RC造とも)、石造の機関庫などが残っており、工場本体の敷地内にも幾つかの遺構が残存している。社宅街では、幾つかの四戸建社宅(社員用、現業員用とも)が残っているほか、天水タンクなども残っている。中には、T14(1925)年頃とされる写真に写り込んでいる社宅と考えられる社宅もあるが、現在空き家となって荒廃しつつある社宅もあり、今後、緊急かつ詳細な調査と記録が必要である。

4. 北大東島における旧大日本製糖の社宅街

北大東島では、普通燐鉱と燐酸ばん土鉱の採掘が行われていた。露天掘りで採掘した燐鉱石は回転式乾燥機もしくは日光で乾燥させて貯鉱した後、積取船で内地に運搬し、加工して主に肥料として用いられた。

図2に、昭和10年代後半頃の旧大日本製糖北大東出張所の社宅街の復原図を示す。工場は、採掘地区からも近い港付近に立地しており、輸送や積み込みの利便性のことを考えれば、最も妥当な位置であろう。社宅街は、工場の東側(山側)に隣接して展開されているが、南大東に比べればかなり規模が小さい。また、採鉱にあたる鉱夫の宿舎は、この社宅街とは別にあり、社宅街の南側の大正村や北西側にある下坂村などに設けられていた。

南大東と同様に、関連施設も設けられた。倶楽部、テニスコート、野球運動場、売店、病院、小学校などであ

る。ただし、小学校は社宅街からは離れた島の中央部に立地し、T7(1918)に南大東の分校として開設され、T10には私立北大東尋常小学校となった。

工場関連施設では、燐鉱石貯蔵庫と燐鉱石積荷棧橋の遺構のほか、幾つかの倉庫、発電所とされる遺構ならびに水タンクなどが残っている。汽罐室と考えられる遺構には、三石耐火煉瓦加藤合資会社製と推測される耐火煉瓦が残っている。北大東出張所（売店を併設）の遺構、

上級社員用倶楽部とされる式六荘、一般社員用とされる倶楽部の遺構などの関連施設も残っている。

社宅については、四戸建社宅2棟が現存しており、そのうち1棟は現在も使用中である。また、社員浴場風呂場と貯水タンク、鉱夫用であった下坂浴場風呂場と水取場の衛生施設も残っている。戦前期の社宅と推定されるものも残っているが、詳細を確認できておらず、南大東と同様に、早急かつ詳細な調査と記録が必要である。

5. まとめと今後の課題

筆者らが研究を進めてきた南洋興発の工場と社宅街は、海岸線に隣接し、比較的整然とした街区で建設されたが、南大東島における戦前期の工場と社宅街は、島の内陸側に、かつ地形に沿って建設された。しかし、工場や社宅街と農場を結ぶ鉄道によるネットワークの形成は共通している。今後は、台湾はじめ、北海道、朝鮮、樺太、満洲についても調査を進めたい。

付記 本報の一部は、平成20年度科学研究費補助金（若手研究（B）, 課題番号 20760430）（基盤研究（C）, 課題番号 20560598）によった。記して謝意を表す。

参考文献：

- 1) 図1と図2中に明記したほか、九州大学大学院芸術工学院西山研究室編：国立民族学博物館共同研究会「ヘリテージ（遺産）の所有と利用に関する観光文明学的研究」南大東島観光地域づくりシンポジウム実施報告書，日本交通公社，2007.7。
- 2) 江崎龍雄編：大東島誌，江崎龍雄，1929.4。比嘉寿助：村制二十周年記念 南大東村誌，南大東村役所，1966.6。南大東村誌編集委員会：南大東村誌（改訂），南大東村役場，1990.1。北大東村誌編集委員会：北大東村誌，北大東村役場，1986.6。



図1 旧大日本製糖大東製糖所社宅街復原図（写真は現況）



図2 旧大日本製糖北大東出張所社宅街復原図（写真は現況）

*：熊本県立大学環境共生学部 准教授・博士（工学）
 **：アトリエ イマージュ
 ***：熊本県立大学環境共生学部 助手・修士（環境共生学）

* Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.
 ** Atelier Image
 *** Assistant, Prefectural University of Kumamoto, M. ESS